

## ある女性幼児教育者の記録 ～社会学的視座から～ II

鈴木 久美子

キーワード／藤野敬子、ドキュメント法、女性史

### 1. はじめに

本稿は、幼児教育者・藤野敬子氏に対して実施した聴き取り調査をもとに編纂した「昭和から平成を生きた一人の女性幼児教育者の物語世界」の記録集であり、拙稿「ある女性幼児教育者の記録 ～社会学的視座から～ I」（常葉学園短期大学 紀要第40号掲載）の続編である。

まずは改めて、藤野敬子氏の履歴を辿り直しておきたい。

藤野敬子氏は1926（大正15）年に藤野滋・ひさ夫妻の次女として誕生し、愛媛県松山市で少女期までを過ごした。1943（昭和18）年に、松山の私立勝山幼稚園で保育者としてのスタートを切ったが、終戦末期に戦災にあい、家族で静岡に移り住むことになる。そこで、1948（昭和23）年から静岡第一師範学校（現・静岡大学）附属幼稚園に勤務し、1973～86（昭和48～61）年まで同園副園長を務めた。ただし、その間の1962（昭和37）年から5年間は国際基督教大学で学ぶという経歴をもつ。そして大学卒業後、再び静岡大学附属幼稚園に戻り定年まで勤めた後は、東京の東洋英和幼稚園に迎えられ、1990（平成2）年まで園長として名門幼稚園に新しい風を吹き込んだ。また、複数の保育者養成校でも教鞭をとって後進の指導にあたる一方、文部省（現・文部科学省）幼稚園教育課関係のさまざまな研究協力者にも名を連ね、日本の保育界における保育思想のひとつのターニングポイントとされる平成元年の幼稚園教育要領の改訂にふかく関わった。

以上のことから、藤野敬子氏を一言でとらえるならば、戦後から昭和を経て平成の現在に至るまで、自身の言葉によれば66年間にわたって<sup>1)</sup>、第一線で幼児教育に携わってきた人材であるということであろう。長きにわたるその保育実践において、数知れぬ子どもたちはもちろんのこと、現場保育者および保育研究者にも大きな影響を与えてきた。

だが、筆者の立場としては、調査対象者である藤野氏を、ただ氏の幼児教育者としての業績にのみ焦点を当ててとらえるものではない。ある信念をもって、昭和から平成を生きた一人の女性の姿を追っていくものになりたい。そこで前稿では、藤野氏を育んだ家族とその少女期、時代は戦前から戦中までを、藤野氏の〈語り〉から年表的に追っていくという手法で編纂した。しかし、さらに本稿ではドキュメント法を取り入れ、自身の〈語り〉と共に、様々な記録から得られた第一次資料を活用し、「藤野敬子という女性の人生」を見つめることを試みていく。

## 2. 研究の目的と方法

本研究においては、対象者である藤野敬子氏に対しての聴き取り調査がその中心的方法であるが、ドキュメント法も併用していく。ドキュメント法とは、手紙、日記、自伝など、記録された第一次資料を活用し、それを内容的に分析する方法である。対象者の心理に踏み込める場合もあり、また対象者の記憶が薄れた過去について書かれた記録の場合には、現象の変化を把握する時系列的な分析の格好の材料になるなど、聴き取りのみに頼るデータ収集の不確かさを補い、あるいはそれらのデータの厚みを増す重要な方法となる<sup>2)</sup>。

このドキュメント法活用の代表的な研究としては、ポーランドからアメリカに移民した人々に焦点をあて、彼らと母国ポーランドの農民との往復書簡、あるいは新聞記事、裁判記録などを分析した、トマスとズナニエツキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(The Polish Peasant in Europe and America, 1918-1920) や、ミシガン湖畔にある高級住宅街とこの地区に接するスラム街という2つの対照的な地域の生活をとりあげるために、子どもの作文、下宿屋の登記簿などまで活用したゾーボアの『ゴールドコーストとスラム』(The Gold Coast and the Slum, 1929) などがあげられる<sup>3)</sup>。

そこで本稿では、各種のデータ収集を組み合わせることで、それぞれの技法を補強し合い、より有効性を高めるという発想に基づき、聴き取り調査およびドキュメント法で得られたデータを併せて分析を進めていく。なお聴き取り調査は、2009(平成21)年6月6日、7月4日、8月14日、9月7日、2010(平成22)年2月28日、3月8日、3月18日、3月27日に、いずれも4時間程度の時間をかけて、藤野氏の自宅において実施した。そのなかで得られた自身の〈語り〉と、本人あるいは周囲、関連機関から得られた様々なドキュメントを重ね合わせて、藤野氏の人生を、その時代を、その社会を、そして藤野氏の保育思想を浮かび上がらせていくことを目的に本稿は構成されている。なお次章より、人名はすべて敬称を略させていただく。

## 3. 藤野敬子の原点を探る ～キリスト教とのかかわりのなかで

### (1) ミッションスクールの日々

藤野敬子の人生観、そして保育観を形成した原点のひとつとして、松山東雲高等女学校(現・松山東雲短期大学)での学校生活があげられよう。女学校時代の数々のエピソードを語る藤野は、女学生時代を彷彿とさせるようなはつらつとした表情を浮かべる。そしてまた、その記憶は鮮明である。そこで、その生き生きとした〈語り〉と、『松山東雲学園百年史』(以下『百年史』とする)を中心としたドキュメントを重ねあわせることによって、より藤野の保育観、そして何よりも生き方そのものを形成した根幹にあるものに迫ってきたい。

藤野が1938(昭和13)年に入学した松山東雲高等女学校は、1886(明治19)年に二宮邦次郎(1860-1926)によって創立された四国最初の女学校、松山女学校がその前身である。創立者の二宮は小学校教員を務めていたが、同志社の創立者新島襄の説教に感銘を受けたことから同志社に学び、伝道者となった。牧師として1885(明治18)年に松山第一基督教会(現・

日本キリスト教団松山教会)を創設した翌年、松山女学校を開設するに至っている。彼は、聖書に基づいた生命の尊厳を自覚し、賢明で自立的な、そして国際的視野をもつ人物を育てる女子教育こそ、日本の将来のために必要だと確信し、学園の基礎を築いたとされる。その教育の理想は、女性に学問は必要ないとの当時の風潮の中で画期的な考えであった。なお『百年史』には、創立当時、その理念に共鳴した人々からの寄付が多く寄せられたとの記述が認められるが、その中に、藤野にとって祖父にあたる藤野漸の名も、「久松家（旧伊予松山藩主・筆者注）家職藤野漸」として記されている<sup>4)5)</sup>。

松山には、県立で城南女学校と城北女学校と一流校があって、それに二流、三流の学校があるわけだけど、その中にミッションスクールの、私が出た松山東雲学園があったんですね。そこの西村郁夫先生っていう先生が、京都大学に行かれて、京都大学の総長のお嬢さんをももらったくらい、将来を有望視されてた方なんです。だからどんなにでも出世できる道が開けているのに、松山に帰って、ミッションスクールに一生を捧げた人。その先生と父が友人で、父は先生を尊敬していたので、娘二人を託したんですね。

父が西村校長のところを娘を託そうと思ったのは、とても卓見だったと思います。面白いことに、私立で経営が大変だったらしいので、西村先生は、自分の先輩や後輩で松山の男子校なんかの校長までやった人が退職してね、恩給がつくとお呼びになるんです。だから元校長っていうのが8人くらいいたんです。みんな恩給もらって、その差額で済むでしょ、給料が。だから数学も生物も物理も化学もみんな男の校長先生を務められた方がずらっと。小学校の古手の先生は庶務とか会計に入られて。それはもっぱら経営のためだったんですね。だから月給は少して、でも人材は豊富で、すごく幸せだったんですね。

藤野の父親である藤野滋の友人であった第4代校長・西村郁夫(1889-1944)は、松山市に生まれ、松山中学校から京都第三高等学校に進学、さらに東京帝国大学史学科を卒業している。大学在学中から、帰省すると、臨時に松山女学校の教壇に立つこともあったという。『百年史』では、西村について以下のように記している。

1918(大正7)年4月教頭として就任して以来、校長時代の3年9ヶ月を含めて26年4ヶ月、本校(松山女学校より松山東雲高等女学校まで)の教育に専念した。校長時代は第二次世界大戦の最も深刻な頃で、全ての物的資源、人的資源(人間は人格ではなく資源であった)は、戦争完遂、敵国殲滅の至上命令に優先されて欠乏し、本来の教育が成り立たない状況の中で、学校の教育と経営をどのようにして維持するのか、とくに反キリスト教的な条件と制約をできるだけ受けとめながら、創立の精神をいかにして守るのかに腐心し惨澹したのであったが、性来蒲柳の質であった身はそれに堪え切れず、在職半ばにして倒れたのであった<sup>6)</sup>。

藤野が松山東雲高等女学校に在籍していたのは、昭和13～18(1938～43)年の期間であり、まさに日本が戦争へと突き進んでいったその時代であった。そして、藤野自身もそうした時代と西村の死を結び付けて語っている。

女学校もいろいろ苦難のときでね、大変でした。でもそれに耐えて、つぶされないぎりぎ

りのところで妥協しながらきたでしょ。西村先生はその苦勞がたたって、途中で亡くなるの。

ホイテ先生っていう先生、ほんとはホイトっていうんだけど、松山弁で「ほいと」っていうとこじきのことなのね。それで、ホイテ先生って呼んでるわけね。その先生もなかなか骨のあるいい先生でしたね。苦勞なさったんじゃないかしら。戦争中だから、連合司令部の場内の兵隊さんのところに勤勞奉仕に行く時も、ホイテ先生は真っ先に先頭に立ってね。やっぱりそういう時に後ろ指を指されないように、ミッションスクールは戦争に反対してるって思われぬように、一生懸命勤勞奉仕に真っ先に行ってね。

アメリカ人のメルル先生が帰国する時も、送別会なんかしないで、夏休み中に私と友達と2人でご挨拶するようになって呼ばれて、誰もいない学校で、最後だから英語でご挨拶したいってことで、大急ぎで日本人の英語の先生のところに行って、こう言いたいんだけどってお願いして、ぱっと書いてもらって、それを私と友達が2枚持って、私が始めのところをするするするって言うと、友達が次を覚えてて、友達が言ってる間、私が次を覚えてて、2人でこぼこぼことね、ご挨拶したんですよね。そしたら先生は最後の送別の言葉を英語でとにかく曲がりなりにも言えたでしょ。すごく喜んでくださって、べらべらべらって言われたけど、今さらわかんないって言えないし。「お姉さんによろしく」っていうのだけはわかったんですけどね。それで、お別れしたんです。

キリスト教の学校に、そういう時代にいたってことはありがたいですね。キリスト教が弾圧されたときにいたってことは強みなんです。戦後の華やかな時からじゃなくてね。

藤野の〈語り〉には西村のほか、第3代校長オーヴ・S・ホイテと、カタリン・メルルの名が登場する。

第3代校長オーヴ・S・ホイテは、1874年にアメリカ合衆国メイン州ポートランドに生まれた。マサチューセッツ州サウスハードレーのマウント・ホリヨークカレッジを卒業し理学士(BS)の学位を受けて、母校の化学実験室で助手として働きながら研究を続けた後、アメリカン・ボード(海外伝道組織)の外国宣教師として、1902(明治35)年に神戸女学院に着任、理科教授をしつつ、1918(大正7)年まで在職した。その間も研究を続け、母校から文学博士の学位も受けている。

松山女学校(当時)が校長の適任者を探していたなかで、神戸女学院とは宣教師が同じアメリカン・ボードから派遣されていること、創立のころから多くの教師の応援を受けてきたことから、松山女学校を卒えて神戸女学院へ遊学する者も少なくないなど、最も関係が深かったことから、神戸女学院から誰か一人校長として来てもらい、地方のキリスト教女子教育のため献身してもらえないかという話が起り、ホイテがその招きに応じたという。1919(大正8)年、ホイテ46歳のときであり、翌年に校長に就任して以来、松山女学校の教育・経営の整備に力を尽くした<sup>7)</sup>。

だが、1932(昭和7)年、高等女学校令に拠る松山東雲高等女学校認可申請の際、「基督教」という語を用いることは許されず、「敬虔ナル信念ノ涵養」という語になり、1937(昭和12)年の「入学案内」には、「宗教的の信念の確立」ということばになって一般化され、さらに教育の対象となる者は、「日本婦人」とか「国民」という風に限定化された。戦争完遂のためには、「基督教」では不都合であり「女子」「婦人」「人格」ではなく、「最も堅実且つ有能なる国民」(同入学案内)でなければならなかったのである<sup>8)</sup>。

そして1940（昭和15）年9月には、キリスト教教育同盟（現・キリスト教学校教育同盟）総会が青山学院において開催され、戦時下におけるキリスト教新体制に対応するキリスト教教育の改革案が協議され、「現下日本の現実に即応する学校体制を確立する。そのためには、校長、部長などの責任ある地位や教授には、なるべく日本人を採用すること」などの方針が決定された<sup>9)</sup>。その結果、松山東雲高等女学校においても、ホイテ校長は辞任し、当時教頭であった西村郁夫が後任の校長を務めることとなった。

1940（昭和15）年12月31日、ホイテは離松した。学校日誌はその日のことを以下のように綴っている。

12月31日（火）晴れ

ホイテ前校長並令姉セラー・C・ホイテ氏帰米ノ途ニ就カル 午前9時20分生徒ハ駅前ニ集合シ賛美歌441番ヲ歌ヒ送別ノ最終ノ会见ヲセナリ、9時55分見送人一般約80名同窓生約110名本校職員生徒約400名ニ送ラレ涙ノ中ニ離松セラレタリ。青野魚木教師同伴、西村校長ハ3日神戸ニ至リ見送ル予定<sup>10)</sup>。

もう一人のカタリン・メリルもまた、アメリカ合衆国マサチューセッツ州クレイシー出身であり、1924（大正13）年に着任した後、英語教育を中心に体育、特に水泳やキャンプ指導などに力を注いだ。しかし、藤野の〈語り〉にあるように彼女にも学校を、日本を去る日がやってくる。『百年史』の記述をここでも重ねておこう。

満州事変より日華事変と拡大しさらに米、英、仏、蘭等の諸国との間も険悪の度を増して、1940（昭和15）年12月ホイテ校長は病弱の姉ミス・セラーを伴って帰国したが、カタリン・メリルはなおも在留し公務に精励した。しかし、1941（昭和16）年に入って日米間は益々緊迫し、7月アメリカは在米日本資産の凍結、8月対日航空用ガソリンの禁輸を行い、わが国又南部仏印へ進駐するなど、これ以上日本に踏み止まることは本人にとり学校にとり益をもたらさずと判断して、遂に同年8月8日質素にしてしかも深情溢る送別会を親交会主催にて開き、10日メリルは故国アメリカに向かって松山を去った<sup>11)</sup>。

藤野は先に述べたように、昭和13～18（1938～43）年に松山東雲高等女学校に学んだ。『百年史』では「第5編 試練期」の章と名付けられた、そんな時代の在學生であった。

そうした重苦しい時代の中で、しかし藤野の女学校生活は珠玉の時間であり、社会と対峙する眼を養ったかけがえのない時期であったと、藤野の〈語り〉に応答した聴き手である筆者はとらえている。だが藤野自身、在学中、あるいは卒業後間もない頃には、自分自身のなかでは少し異なる思いをもっていたようでもある。

昭和37（1962）年の「校報兼同窓会報 雪びら」の卒業生だより欄に、戦時中に卒業した卒業生の一人として原稿を求められた藤野は、以下のように記している。

先日、自分の受けてきた教育について書くという宿題が出ました。その時最初に思い出したのは、南京陥落の映画を見た後で大野さんから「私は何も感激しなかったけど一体何を書けばいいの」と感想文を書く相談をうけた時のことでした。そういう時はいつも、お決まりの文句をただ要領よく並べかえるだけの自分に気がついてあの時は当惑しました。私の女学校生活は問題を深く掘り下げないで表面的なこと終始し、パリサイ人のようでしたので卒業後数年は思い出すのも嫌でした<sup>12)</sup>。

しかし、この文章を寄せた時、実は藤野は人生においてひとつの決断をし、行動を起こしたばかりの時であった。

藤野の戦後は、1945（昭和20）年7月26日、松山市内で戦災に遭い、当時結婚して静岡で暮らしていた姉夫婦の元に父母と共に身を寄せたことから、静岡の地で始まっている。

姉の夫は静岡の女子師範学校の国語の教官だったんです。昭和16年に（静岡に）来て、夫は21年に亡くなったから、5年くらいの結婚生活で、子ども1人だけ生まれて、若くして亡くなったんです。その義兄が亡くなる前にね、私達親子が松山で戦災にあっていたので心配して、松山の私達が疎開していた所まで訪ねて来てくれて、静岡は幸い焼け残ったから来ないかって呼びに来てくれたの。

もう（その時勤めていた勝山）幼稚園も焼けて仕事はないし、町も焼けて、それで親子3人で静岡に来たんです。私と母は初めて松山を離れて、よく富士山が見えるって喜んできたの（笑）。それに、松山では祖父が伊予銀行の頭取をしてみましたしね、正岡子規の関係もあるし<sup>13)</sup>、いわゆる家柄がいいっていうあれだったんですけど、静岡は誰一人知らないところでしょ。誰にも気兼ねすることなくて嬉しかったですね（笑）。

あの、それで楽しく暮らしていたんですけど、義兄がね病気で亡くなって。それでその同僚の先生が、未亡人になった姉を、第一師範学校（現・静岡大学）附属幼稚園に採ろうかって言ってくれて、それで姉が附属幼稚園に採用されたんです。

私の方は、静岡に来てから、姉とバイブルクラスに通って、のんびり英語の勉強したりして遊んでましたら、そのバイブルクラスでタイプを教えてくださいましたんでね。それで、私もタイプを習っていたら、お茶会社からタイピストが欲しいって、私をね採用したいという話がありました。でもそばから姉が「私じゃいけませんでしょうか」って（笑）。姉はタイプが上手なのね。元々女学校の専攻科も英文科でずっとやってたし。でも私は下手だったんです。タイプは姉の方が上手なんです。でも姉は幼稚園はどうもじっくりいなくて、タイピストの方がいいって言うんで、じゃあって姉がお茶会社に行ったんです。そして附属幼稚園は、急に姉が抜けたら困るだろうっていうんで、私が後任が見つかるまでっていうことで（笑）。でも最初に姉を幼稚園に紹介してくださった方も、お姉さんより妹さんの方が子どもの扱いはだいぶ上手だって。この2人を比べて、妹さんの方がよっぽど保育に向いている。お姉さんはタイプの方がよかったですらうって。

だから人間の運命なんて変なもんですよね。そうやって、仮に後任が見つかるまでって言ってたのが、長くなっちゃった。それから32年ですから（笑）。

義兄の若すぎる死から、未亡人になった姉にたまたま紹介された幼稚園教諭の職。藤野には最初、タイピストの職が用意されていた。しかし、姉妹がそれを交代したことによって、藤野の運命は決定づけられた。しかも、ミッションスクールを卒業し、その附属幼稚園でキリスト教保育をしていた藤野が、再び幼児教育に携わることになった場所は、たまたま国立大学の附属幼稚園であった。1948（昭和23）年のことである。

そしてそれからおよそ14年間にわたって附属幼稚園で働いていたが、1962（昭和37）年、幼稚園を退職し、国際基督教大学選科に入学した。36歳の時であった。

13年10ヶ月勤めてたんだけど、附属幼稚園は国立だし、いろいろ行き詰まることがあってね、だからいっぺん勉強してきたいと思ったんです。それで元々行きたかった自由学園は行きそこなったけど<sup>14)</sup>、今度は国際基督教大学にどうしても行ってきたいと思って。そのとき、ちょうど甥が就職したんです。だから家庭的に、経済を私が支えなくてもよくなったってこともあった。人間って誰かのために働いているときは、やめようなんて気はないわけね。だけど、そんなに私の給料あてにしなくても暮らせるとなったら、そしたら急に行きたくなくなった。知れば知るほど魅力があって行きたくなくなったの。退職金もらって行ったんですもんね。36歳で行ったの。だから、学生が先生と間違えてお辞儀するの(笑)。

選科生1年、本科4年の5年間よく行ったと思う。卒業するときはトップだったの。卒業式のときに代表で挨拶したのよ。卒論は比較教育にしました。タイトルは「英国の幼年教育－就学年齢の決定をめぐる問題」ですね。でもそれでね、行ったからって行ってどうってことないの(笑)。つまり資格がとれるとか、そういうこと何もないとこですからね。

それで、幼稚園を辞めるときの受け持ちの子どもが、卒園させるからいいと思って辞めたんですけど、その子たちが、なんで幼稚園辞めるのって怒ってね。で、そんな大学、今から行かなくてもいいじゃない。偉くなくてもいいじゃないの。バカのまんまでいいじゃない(笑)って。その反対の理由がね。子どもっておもしろい(笑)。バカのまんまでいいじゃないって大学に行くの反対したの。他の人はえらいですねとか、いろいろ言うてくださるけどね(笑)。

だからね、バカのまんまでいいじゃない、今のまんまでいいじゃないって子どもに言われたから、大学に行っても立身出世のために行ったんじゃないってこのだけは肝に銘じてたんですよね。

前述した「卒業生だより」は、ちょうど静岡大学附属幼稚園を退職して、国際基督教大学選科に入学した年の夏のものである。続けて、藤野の文章を読み進んでいこう。

けれども年が経つにつれて母校から受けていた影響の大きさがわかってきました。ことにあの当時は進歩的だった校風が一つひとつ崩されていき、内なる則によって律せられる人をめざした教育が形式的な軍事主義の風潮におし流されそうな時代でした。この急激な変化を体験したことによって、教育界に反動の揺り返しがきたこの頃、何か揺るがないものが私の体の中に植えつけられていることを感じます。黙祷の最中に私の指先が曲がっていると直しにこられた先生に対する驚きなどを、前半の自由のなかに責任をとわれた教育のことと対照して話しますと、体験をもっている人は強いなどと言われます。ところが肝心の自分の生き方は、いつのまにかまた要領よく言動をととのえて世の中に適応していくようになっていました。そしてそれに呼応して母校の精神だけは固く守ろうとしておられた先生方、戦斗帽をかぶろうとなされなかった牧師さん、自分の気持ちに正直に生きていたお友だちのことなどが年とともに深い尊敬の念をもって思い出されてくるのでした。今度、大学に来たのも一つには要領よく生きていく自分がいくら幼児の魂をゆすぶるような核心をついた教育をしたいと願っても身勝手なことだと気がついたからでした<sup>12)</sup>。

36歳の決断。国立大学附属幼稚園での保育歴を積み重ねていたなかでの転身だった。そして、本人の〈語り〉の中で、繰り返し使われた「偶然」という言葉。「偶然」保育者になっ

た、「偶然」国立の幼稚園に勤めることになったという、「偶然」の連続の保育者生活。そのなかで、唯一自分の意志で決めたのが、大学進学だった。

ほんとに私が自分の意志でコースを決めたのは、たった一度、静岡大学附属幼稚園を13年10ヶ月勤めたあとで、なんとなく国立のそういう世俗的なところで、汲々いっしょうけんめいしてたんですけど、なんかもう一度元にもどりたと思って、国際基督教大学に入ったのが唯一、自分の意志で入ったんですね。

さてここからは改めて、藤野の〈語り〉から女学校生活を振り返ってみよう。

学校の授業は、選択科目っていうのがたくさんあって、自由に選べるってことがあった。選べることの楽しさをその時に教わったの。それと自習時間っていうのがあるんですけど、その時に体の弱い人は体育館のバルコニーで日光浴するんですよ。日光浴する洋服っていうのがあって、それに着替えて、日光浴するんです。とにかくその人の個性や能力にあわせて、必要なコースを様々に多様に提供して下さった。そういうのもあとの幼稚園で、子どもが選ぶこととか、そういうのが好きになったのは、やっぱりそういうのをこちらが受身でしていた時に、経験したことが大きいと思うんですね。

それでたとえば遠足ですと、行きは全校生徒が揃って行くんです、目的地まで。松山へ行くとおわかりになるんですけど、お城山っていうのが真ん中にありまして、そのお城山の中腹にミッションスクールがあったんですね。ですから、かなり離れたところからでもお城山は遙か彼方に見えるんです。それで帰りはね、自分で好きな道を選んで、とにかく3時までには学校に帰り着くように。ただし、一人になってはいけないっていうだけで、ぱーっと離されるんですよ。どっちの道行こうか。こっちのほうが良さそうね。あ、誰か先客があった。あ、こっち行こう。迷いそうになって、ふーっとお城山を見ると、方角だけは合ってるわけですから（笑）、いろいろ自分たちで思って、無事に辿り着くの。

つまり生徒が自由に選択する幅、選択科目がたくさんあって、頭ごなしにされることが少なかったのね。それで宣教師の先生もいらして、お昼は食堂に先生が必ず一人ずつ座って、食堂で先生と生徒がなごやかに話すの。そういえば、メリル先生という外国人の先生は、お昼はいつも果物で、私たちはうらやましくてね（笑）。

だから、選んで、自分で各自考えてするってことの楽しさを、女学校のときに私は教わったのが、やっぱり保育者として強かったんじゃないかなと思うんですね。

「選んで、自分で考えてするってことの楽しさを、女学校のときに教わったのが、やっぱり保育者として強かったんじゃないのかな」と語る藤野であるが、まさにここに藤野の保育の原点があるといえよう。

そしてこの藤野の保育観、保育思想をしっかりと受け止めた一人の若い保育者がいた。現在、お茶の水女子大学附属幼稚園副園長の宮里暁美である。宮里は大学卒業後、新卒の保育者として、藤野が副園長を務める静岡大学附属幼稚園に3年間勤務した。3年後、附属幼稚園を去ることになった際に、3年間の保育の記録として、「保育実践レポート」を自らまとめている。そのレポートの「おわりに」に、宮里は以下のように記している。



私が初めて、幼稚園に勤務した日、その日はちょうど新しいクラスの部屋づくりの日だった。「あなたはこのよ」と教えられていった部屋は、ロッカーも机もおもちゃも何もかも中央に集められており、「好きなように考えてつくりなさい。あなたの部屋なのだから」といわれた。すべてが変革可能だった。「あなたの考えは？」ときかれた。自分の中に蓄えがなくなやんだこともあったが、やはりこのことにより私は育ったと思う。副園長である藤野先生からは大切なことを学んだ。

先生は、ことこまかに行動を指示したりすることはしなかった。しかし一緒に行動しているとおどろかさされるが多かった。

ひょいひょいひょい、飛び回り、子どもの発想実現のための手段をこうじる。私が「まあいいや」と流してしまいそうなこともでも、さっと体を動かしていく。そして、常に子どもにとっては何が必要なのかを問う強い姿勢である。…(中略)

遠足でも「並んで歩く時と、先生の帽子がみえるところならどこへいてもいい、でもみえるかどうか自分でたしかめながら歩く時の両方が必要。教師のいうことをよくきく、いわゆるおりこうさんが、さあ好きなどころへひろがっている、となると不安になってひろがりきれなくなる。いろんな歩き方を考えてみるといい」と教えられた<sup>15)</sup>。

一方、藤野自身は先に紹介した「卒業生だより」のタイトルを「母校で習った生き方を今度こそしっかりと」としたうえで、以下のように締め括っている。

もし私が公立の女学校に入っていたら、前の職場で十分満足していて、決して今ごろになって国際基督教大学に入って、母校で教えてもらった生き方を、今度こそしっかりと掴もうなどは思わなかっただろうと考えますと、母校や教会の先生方に対して、また西村郁夫先生を信頼して母校を選んでくれた父に対しても感謝の気持ちで一杯です<sup>12)</sup>。

## (2) ミス・マクラクランとの出会い

藤野は松山時代の1940(昭和15)年、松山東雲高等女学校3年生の時、洗礼を受けている。

姉が行っていたので、日曜学校には小学校から行っていました。大街道教会です。その佐藤さんっていう牧師さんが偉い人でね、とっても。戦争中だから、護国神社に参拝しろって話があるわけですよ。それをみんなで相談したけど、佐藤牧師だけは絶対に行きたくないって言ってね、そういう貫いたんです。あの頃は大変だったんですよ、キリスト教は。戦後はキリスト教は華やかになりましたけど、一番弾劾されてる時のキリスト教でしたからね。でもそれを守り抜いて。骨のある先生だったから。戦争中になびかない人なんて少ないですよ。

でも女学校のときは、そんなに熱心な信者じゃなかった。静岡にミス・マクラクランっていう先生がいて、そのバイブルクラスにずっと行ってたんですよ。ここへは熱心に通ってました。私は、この先生と出会って大きかったですね。すごくいい先生だった。

静岡に移り住んだ後の新たな出会い。たまたま父親がこのバイブルクラスの看板を見つけてきたことから、通い出した。

草深におうちがあって、夕方集まりまして、聖書を読んで自分の感じたことなんかを話し合うんです。集まるのは旧制高校の学生とか、外科の先生とか、すごく面白かった。だから幼稚園だけの世界よりそこの世界のほうが面白かったですね。

アニー・メイ・マクラクラン（1895-1991）は1895年にカナダのマニトバ州パイプストーンに生まれた。カナダ・メソジスト教会婦人伝道教会に属し、1924（大正13）年に来日し、静岡英和女学校に配置され、教師・幼稚園・教会伝道・静岡ホームの奉仕にと働いた。1924（昭和4）年より6年間、甲府に赴任し、山梨英和幼稚園園長も務めている。このことから農村伝道に関心を示し、特に農繁期の農村婦人のために一時託児所の設置を行った。

1936（昭和11）年に静岡に戻ったものの、戦時体制化のなかで、前述した松山女学校のホイテやメリル同様、外国人教師として母国への帰国を迫られた。学校の寄宿舎の一室で一人軟禁状態で置かれ祈りだけの生活を送るなかで、彼女の元を密かに訪れる者にも官憲の目が光るようになったことから、1942（昭和12）年、最後の捕虜交換船で帰国を決意せざるを得なかったという。しかし帰国後、母国カナダには敵国人となった日本人キャンプが設置されており、マクラクランは国内最大の「タメシ収容所」で日本人のために働いた。そして、終戦まもない1947（昭和22）年、静岡へと戻ってきたのである<sup>16)</sup>。

静岡英和女学院同窓会が発行した女学院に縁のある宣教師たちの歩みをまとめた記録集『倭文はた 愛と奉仕の人々』におけるミス・マクラクランの章に、藤野の通ったバイブルクラスについての記述がある。

敗戦後の10月、占領軍の後を追う如くアメリカの教会代表が軍用機で来日し、「リバーサイド」の約束を果たすため、同時に戦後日本の窮状を視察して食糧援助や日本の教会・キリスト教主義学校の復興に尽くす事となった。この為、まず宣教師復帰の道を開き『ララ物資』（＝日本・朝鮮救援用食糧・医療・薬品）の輸送・配布にあたる事となったのである。かくしてミス・マクラクランもまた、1947（昭和22）年8月29日、飛ぶ様にして待ち兼ねた日本・静岡へと帰ってきたのである。教会用のオルガンや日本で必要とされているであろう多くの生活必需品を携えて…。敗戦の混乱、戦災の瓦礫の山の中で日本人と共に、彼女からは一つの愚痴も聞かれなかった。元来スマートであったが服装全て今や質素であり、それどころか彼女にはなすべき事が沢山あったのである。学校での週22時間の授業に止まらず、特に戦後の彼女で目覚しいのは校外での活躍であった。夜は若い人を集めてのバイブルクラスを開き、男女の別なく多くの人がこの聖書研究会の後のサークルに参加して様々な議論・語り合いをし、彼女は親身にその相談に乗った。このようなミス・マクラクランを人々は「マク先生、マクさん」と呼んで敬愛し、決して信仰を押し付けなかったが、何時しか彼女の語る「私の背後に在られるもの」が信じられていったのである。そしてこの青年の集いから多くの教育者や長沢巖、広瀬泉蔵、原崎清、杉山謙治らの牧師が育ち、その他彼女の心を継ぐ人々が生まれていったのである<sup>17)</sup>。

このようなミス・マクラクランを囲む多くの青年の中の一人として、1947（昭和22）年から1951（昭和27）年の間、20代の藤野はこのバイブルクラスに通い続けた。

マクラクランはその後、戦前から関心を寄せていた農村伝道に励むために、吉田町の農家に居を移し、現在「榛原教会」と呼ばれている場所での奉仕を行い、やはりその傍ら季節託児所を開き農繁期の母親たちを助けた。しかし、1963（昭和38）年、68歳になったマクラク

ランは帰国を決意し、静岡駅には彼女を見送る人々が多く集まったという<sup>18)</sup>。だがその時、藤野はちょうど国際基督教大学に進学して東京に居住していたため、羽田で最後の見送りをしている。

そしてその後も、たとえば大学卒業後の自らの居場所について、マクラランに手紙を書いたこともあった。

そこでまずは、大学卒業後に静岡大学附属幼稚園に“戻った”顛末を、その<語り>から確認しておきたい。

大学に行ったことは全然悔いはないですね。あつというまで楽しかった。やっぱり月給もらうのと、払うのでは大違いですよ（笑）。5年間遊ばせてもらったから、それ以上はいいと思って静岡に帰ってきたの（笑）。立身出世で行くんじゃないってことだけ、子どもに言われたからね。バカのまんまでいいじゃんって言われた、あれは痛かったですね。

それで卒業後、仕事を変える気は全然なかったけど、今度こそキリスト教の保育にしようと思って、静岡のキリスト教系幼稚園を訪ねて、私、今度卒業しますから使っていただけませんかかって頼んだら、いいですよってその園長先生がおっしゃったのね。だから私はその幼稚園に行くつもりだったのに、静岡大学附属幼稚園から帰ってこいって話があったんですよ。で、あとから聞いたら、その園長先生が「藤野さん、私の所に来る気になっているけど、静大のほうがふさわしいと思うから、そっちでとりませんか」って、私に無断でわざわざ静大に行って頼んでらしたんですよ。でも幼稚園の空気がなかったんで、1年間は附属中学校で英語を教えるってことなら採用してもいいってことで、籍は幼稚園ですけど、1年間は英語を教えるっていうので帰ったんですね。だから私はね、やれやれって感じで。でも父は元々私を英語の教師にさせたかったんで、父だけは大喜びだったんですけどね（笑）。

そのときの思いを、現在通っている熱海教会での講話の際には、藤野は次のように語っている。

私は最初キリスト教の幼稚園で働いていましたが震災にあって廃園になってしまい、戦後はやむなく国立幼稚園で15年、保育しておりました。が、もう一度キリスト教保育に戻りたいと願い、退職してキリスト教の学校で学び、今度はとっておりましたのに叶えられず、国立幼稚園に再就職となりました。がっかりしてカナダに帰国しておられたミス・マクラランに手紙で訴えましたら「あなたは世俗で御栄をあらわす方がいいのでは？」と励まして下さいました<sup>19)</sup>。

だが、さらに後日談がある。

一番最後に、私が東洋英和に帰ったのは、静岡でずーっとミス・マクラランのバイブルクラスに通っていたことがきっかけです。マクララン先生のバイブルクラスはすごく面白かったんです。マクララン先生はずーっと静岡に長くいましてカナダに帰られてから、一度皆さんでカナダからお呼びしようという話があったんですけど、妹さんがご病気で来られなくなったんです。で、代わりに文集を出しましょうって、文集を出したんですね。で、それを東洋英和の院長先生たちをご覧になって、なんだ、藤野さんはクリスチャンなのかって

わかって、それで東洋英和に呼んでくださったんですね。つまり、静大を退職するときに、東洋英和の園長になって、最後にキリスト教教育を4年間やりましたでしょ。それも私が運動したんじゃないくて、たまたまミス・マクラクランの文集で呼ばれたんですね。

1971（昭和46）年にマクラクランの来日予定があったことから、有志が集まって「マクラクラン先生をお迎えする会」が発足、結果として来日はかなわなくなったものの、文集を作成した。タイトルは「ミス・マックとともに To our friend and teacher Miss May McLachlan」である。そしてこの文集こそが、藤野が念願のキリスト教保育へ“帰る”ことへと繋がったのである。

藤野は、この文集に次のような一文を載せている。

昭和22年の秋、西草深のバイブルクラスに初めて伺った時、マクラクラン先生はピアノを弾きながら Once to every man and nation comes to the moment to decide, …と歌っていらっしゃいました。深々とした響きが今でも耳に残っていて、何か迷うことにぶつかると、この歌が口をついて出てきます。そして先生のお姿が目には浮かんでくるのです。…（中略）あの当時は西草深のお宅まで5分ほど歩いて行って、庭先から縁側へいしょとあがりさえすればお目にかかれたのです。

そこに集まる人たちはバイブルクラスにしては巾が広くて、キリスト教に反発しようとする人たちなどは勇ましいものでした。そういう人たちが力一杯、挑みかかってくるような、しなやかで強靱な信仰というものがどんなに少ないものか、まだ知りませんでした。とにかく欠かさず出席しなくては行けません。…（中略）

昭和22年から27年という一番、のびのびとものが言えた時代に、理想ばかり追っていた若い頃にバイブルクラスで接したマクラクラン先生は明るい思い出につつまれています。…（中略）

先生は日本を去っていく時に「まだこの土地に残された仕事がたくさんあります」とくり返し語っておられました。私たち自身の生き方と結びつけて考えないわけにはいきませんので、マクラクラン先生のそういうお姿を思いうかべることは気が重くて辛いことです。最初に教えて頂いたあの歌も、ただ、なつかしいと言って、すましていられなくなります。けれどもやはり榛原や羽田でお目にかかった時のマクラクラン先生を心の底にいつもしまっておきたいと思っております<sup>20)</sup>。

その言葉どおり、藤野にとってマクラクランは、今なお心の底にしまわれる存在であることが、その〈語り〉からもうかがわれる。

ほんとに私なんか、幼稚園の保育をよくしようという野心に一番負けたとき、子どもが見えなくなるんですね。静岡大学附属幼稚園のとき、Eくんという子がいて、わが道を行く面白い子なんですけど、ちゃんとやるべきことをやらない子なんです。それでMちゃんというしっかり者をつけて、2人をペアにして、運動会のお遊戯に出したんですね。他の子はちゃんとやるんだけど、Eくんは白線があると、白線をわざと踏んだりして、Mちゃんがすぐひっぱってやる、またEくんがやらかして、Mちゃんがひっぱりひっぱりして、やっとこすっとこまあ遊戯を終えたのね。で、やれやれと思って、私はEくんのことばかり考えてたんですよ。そしたらEくんのお母さんがね、運動会が終わって私のところに来て、「今日はありがとうございました。うちの子がちゃんとやるなんて思ってなかったから、それはなんとも

ないんですけど、うちの子と組んだばかりに、Mちゃんがろくろく踊れなくて」って泣かれたんですよ。私はそれまでMちゃんを道具に使ってたわけね。MちゃんならなんとかEくんをひっぱってってくれるだろうって。でもEくんのお母さんは、Mちゃんがせっかくの運動会だったのって、Mちゃんのために泣かれたんですよ。それではとして、今度中学校の運動会にも参加するので、その前にMちゃんのお母さんに、こうおっしゃって泣かれたって話を、クラス全体にしたんですよ。それで、中学校の運動会でも、またMちゃんと組んでおなじお遊戯に出たんですけど、帰ってくるなり、Mちゃんが、「よかった～。今日はEくんがふざけなくて」って真っ先に報告したんです。それで他の子も、「そうだよ、先生、Eくんは今日はすごい真面目にやってたよ」って。ちゃんとみんなで、今度はEくんはどうだろうって見てたんですね。それで、Eくんの顔がば～って輝いてね。お母さんにその報告したんです。最初にそのきっかけを作ってくださったのは私じゃなくて、Eくんのお母さんですよ。自分の子どものことよりも、子どもと組んだばかりにろくろく踊れなかったMちゃんのために泣いてくださった。それがEくんにも届いて、下手は下手なりにとにかく動いたんですからね。そういうときにも、教師っていうのはほんとにMちゃんのことを思うより先に、クラス全体の成績、出来栄えのほうに気をとられて、なんて情けないんだろうって、そのときしみじみ思ったんですね。Eくんのお母さんのおかげです。だから、教師一人でクラスをよくするなんてことはとてもだめで、やっぱりクラスみんなで守って、お母さんのおかげとか、そのように思うんですよ。それで私は自分の野心とかそういうことに負けることがたくさんあったの。

このエピソードは、マクラクランから「あなたは世俗で御栄えをあらわす方がいいのでは？」と励まされたにもかかわらず、「いつしか横道にそれ、目の前の子どものことよりも自分が素晴らしい保育をしたいという野心に捉われるという過ちを犯したこと」<sup>19)</sup>として語られている。

また同様な思いを吐露するものとして、もうひとつのエピソードも語られた。

静岡大学附属幼稚園に、文部省の教育映画をつくるという話があって、そのとき6人くらい対象児をつくって撮ったんですよ。最後に誰を中心にしまとめようかという時に、私は3歳児に面白い活動をする子がいますね、その子を中心にすれば面白い映画が出来ると思ったんです。そしたら若いT先生が、私はKちゃんを主人公にしたいって。Kちゃんっていうのは、大勢いるなかで、いまひとつわからない。朝来てもぼ～と帽子とかばんをいつまでもかけている子なんです、その子を主人公にしたいって言うんです。文部省の映画でしょ。私、やっぱり附属幼稚園のいいところを見せたいと思ってた(笑)。で、結果として、全国の人たちから、なぜさっさと帽子をとらせないんだとかさんざん批判されたんですよ。だから私が名指した子選んだら、すごくいい映画ができたんだけど、それをT先生は、映画をつくるのは子どもを育てるため、うちの幼稚園の宣伝ではないって言われちゃって(笑)、やられたの。T先生は偉かったですよ。私はもっと活躍している子を主役にしたかった。私はこの世的な名誉心が強かったのね(笑)。それで若いT先生にが～んと頭やられたような気がして。あれ忘れられないですね。T先生のおかげなんです<sup>21)</sup>。

自分が、「目の前の子どもの事よりも素晴らしい保育をしたいという野心に捉われるという大きな過ちを犯してしまったとき、保護者であったり、若い保育者であったりが、間一髪の所でその過ちを引き戻してくれた」と藤野は述懐する。そして図らずもその2人は、後に洗礼を受けているということも付け加えられた<sup>19)</sup>。

いずれにしても周りにキリスト者が少なく、教会からも離れていました時に、神様は、よい隣人を恵んで下さっていたのです。在職中、多くの母親や共に働いた保育者からたくさんのことを学ぶことができましたが、その中で最も深く教えられ導かれた方が2人も後に洗礼を受けられたことが忘れられません<sup>19)</sup>。

### (3) 熱海教会にて

現在、藤野は姉と2人、熱海の急な坂道の途上にある静かな家で暮らしている。

東洋英和幼稚園に行くので、(静岡から)熱海に引っ越してたでしょ。東洋英和に行くにはやっぱりちゃんと教会に行かなきゃいけなかった。今の熱海教会はとってもいい牧師先生でね。

私と姉は20年ブランクがあるんですよ、教会に。だからその負い目はね、この間教会を建てるときに、お金をね、匿名で出したんですよ(笑)。20年間さぼってたから。

姉が倒れて、家事をやるのが今3年目なんですすね。元々家事は不得手だったんです。不得手だったから主婦にもならず、職業できたんですけど。家事が得意だったら、とっくに結婚して家事やってる(笑)。

だから今は家庭のことと畑と教会の仕事をやってるの。それで今度牧師さんが夏休みをとるので、かわりに1日なんか話をしろってことでいろいろ考えて、保育者の生活がもう66年で、今年終わりになるんですすね。それで振り返ってみようかなって思っています。

熱海教会で「よき隣人に恵まれて」と題して行われた藤野の締めくくりを、本稿でも最後に記しておこう。

ミス・マクラランが願って下さったようには、み栄えをあらわすことができませんでしたのに、ミス・マクラランの記念誌に投稿いたしましたものが、東京のキリスト教幼稚園の方々の目にとまり、それがきっかけで、定年後に招かれて、ようやく念願のキリスト教の幼稚園で保育する機会を与えられました。それと同時に熱海教会にも転入させて頂き、教会生活も再開できました。19年前の望みが、自分の努力や思惑ではなく、こんな形で叶えられたことも神様のお計らいで感謝で一杯の思いでした。

熱海教会も18年になります。3年前、フリーになってからは、礼拝だけでなく、水曜日の聖書を読み祈る会にも毎週出させて頂けるようになりました。奥田聖幸牧師から深い深いみ言葉の説き明かしを頂いて、今ようやく信仰の歩みに引き戻して頂いたところでございます。洗礼を受けてから65年にもなりますのに、途中、19年も教会からもバイブルクラスからも離れてしまい、まだまだ信仰の証しはできませんが、神様はそのような者にも、いつも共にいて下さって、数々の思いもかけない恵みを頂いたことを心から感謝して終わらせて頂きます<sup>19)</sup>。

#### 4. まとめにかえて

本稿は、自身の〈語り〉と、本人あるいは周囲、関連機関から得られた様々な〈ドキュメント〉を重ね合わせて、藤野氏の人生を、その時代を、その社会を、そして藤野氏の保育思想を浮かび上がらせていくことを目的として編纂してきた。

そこで、その〈語り〉を改めて最初から読み込みながら、関連する〈ドキュメント〉を収集していく作業を行い、〈語り〉といくつかの〈ドキュメント〉を重ね合わせていくうちに、構想の段階では「藤野氏とキリスト教とのかかわり」についてはもっと充分にあためて執筆しなければならないテーマとして、さらに先の稿を予定していたにもかかわらず、筆者自身がそれに一日でも早く触れておきたい気持ちにかられて、本稿で不十分なながらも取り扱ってしまった、というのが正直なところである。

なぜなら、藤野氏の前には、オリヴ・S・ホイテ氏やカタリン・メルル氏、そしてアニー・メイ・マクラクラン氏といった宣教師として使命をもって、明治・大正の時代に海を渡ってきた先人の女性たちがいたこと、そうした女性たちと出会いかかわり、思考したこと、今、私たちの前に藤野敬子氏という幼児教育者が存在するという事実を、まずはとにかく記しておきたかったのである。

もちろん、まだまだ藤野氏の〈語り〉の中には、さらにそこに交差させたい人物や出来事がある。そして、幼児教育、あるいは子どもそのものについても、一つひとつの言葉を丹念に集め、かみ締めながら、〈藤野氏の語り〉として今後も編纂していきたい。

〔付記〕本稿は、平成21年度常葉学園短期大学教員研究奨励制度研究助成費の交付の成果の一部である。

---

<sup>1)</sup> 2009（平成21）年8月14日のインタビューの中で、藤野氏は以下のように語っている。「保育者の生活がもう66年で、今年で終わりになるんですね。満17歳からやりましたので、今、満83歳でしょ。66年も保育者をやったんですね。だから、保育者になった経緯をね、お話ししようかなと思ったんです。なんで保育者になったか。66年も勤めたんだから、ちょっと考えれば、自分で構想をたてて、それで計画をたてて、いろいろ運動してなったように思うでしょ。ところが全部偶然なんです（笑）。おもしろいんですよ。私が自分で保育をしたいとか、自分で、ってこと一度もなかったんですね。不思議なんですよ。ありがたい一生だったなあって感謝してるんですけど。」（鈴木久美子「ある女性幼児教育者の記録 ～社会学的視座から～ I」、203、常葉学園短期大学紀要 第40号、2009.）

<sup>2)</sup> 森岡清志編著『ガイドブック 社会調査 第2版』、16、日本評論社、2007.

<sup>3)</sup> 鈴木久美子「シカゴ学派社会学の都市研究 ―アメリカ―」北川隆吉・有末賢編著『講座日本の都市社会 第5巻 都市社会研究の歴史と方法』、文化書房博文社、53-86、2007.

<sup>4)</sup> 松山東雲学園百年史編纂委員会『松山東雲学園百年史 <通史編>』、33-67、1994.

<sup>5)</sup> 祖父の藤野漸は、旧伊予松山藩主・久松家の家職を務めた人物であり、司馬遼太郎『坂の上の雲』にも登場する。（鈴木久美子「ある女性幼児教育者の記録 ～社会学的視座から～ I」、204、常葉学園短期大学紀要 第40号、2009.）

- 6) 松山東雲学園百年史編纂委員会『松山東雲学園百年史 <通史編>』、532-533、1994.
- 7) 松山東雲学園百年史編纂委員会『松山東雲学園百年史 <通史編>』、243-245、1994.
- 8) 松山東雲学園百年史編纂委員会『松山東雲学園百年史 <通史編>』、521、1994.
- 9) 松山東雲学園百年史編纂委員会『松山東雲学園百年史 <通史編>』、527、1994.
- 10) 松山東雲学園百年史編纂委員会『松山東雲学園百年史 <通史編>』、531、1994.
- 11) 松山東雲学園百年史編纂委員会『松山東雲学園百年史 <通史編>』、406、1994.
- 12) 「松山東雲学園校報兼同窓会報 雪びら」第19号、昭和37年8月30日.
- 13) 藤野家は、正岡子規の母・八重の妹、十重が、藤野敬子の父・滋の腹違いの兄の母であったことから正岡家とは縁戚関係にあたる。
- 14) 自由学園との出会い・憧れについて、藤野は以下のように語っている。  
「家庭生活合理化展覧会っていうのが、松山で子どもの時にありましてね。「合理化展覧会」とはつまり、主婦を対象にした衣食住の展覧会なのよ。そこで家庭生活のあり方とか衣食住とかをずっと展示して。その展示の説明を自由学園の生徒がしてたんです。松山のポーっとしてる田舎の人から見たら、みんな言動がきびきびしているんです。それで憧れました。展覧会の時に食堂で、「自由学園の1日」というビデオがあったんですよ。それを毎日見ている、生徒がいろいろ自治的にやるのが出てましてね、私、自由学園に行きたくなかったです。ずーっと行きたかった。でも父が許してくれなくてね。「理想をもってるけど、現実はそのな理想の学校でもないよ」と言われて、行かれなかったんです。行きたい行きたいと思ってたけど、それは断念したんです。」  
(鈴木久美子「ある女性幼児教育者の記録 ～社会学的視座から～Ⅰ」、207、常葉学園短期大学紀要 第40号、2009.)
- 15) 宮里暁美「保育実践レポート」、72、1981年11月8日発行。このレポート集は手書きで書かれた74ページにわたる手作りのレポート集であり、表紙には「これは、静岡大学教育学部附属幼稚園における私の3年間の保育の記録である」と記されている。保育者生活最初の3年間の言語化した宮里による「作品」としてとらえられよう。
- 16) 松縄善三郎『倭文はた 愛と奉仕の人々』静岡英和女学院同窓会、80-86、2004.
- 17) 松縄善三郎『倭文はた 愛と奉仕の人々』静岡英和女学院同窓会、85-86、2004.
- 18) 松縄善三郎『倭文はた 愛と奉仕の人々』静岡英和女学院同窓会、87、2004.
- 19) 2009年8月に熱海教会で行った講話草稿より.
- 20) 藤野敬子「マク先生を知っている…」マクラクラン先生をお迎えする会『ミス・マックとともに<第1号>』、26-27、1971.
- 21) 文部省初等中等教育局幼稚園課監修「岩波保育ビデオシリーズ：豊かな保育を展開するために みる、きく、たしかめる：創りだす自分の世界」岩波映画製作所